

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究

Interdisciplinary studies on the historical development of Tibeto-Himalayan civilization

2. 研究代表者氏名

岩尾 一史

IWAO Kazushi

3. 研究期間

2015 年 04 月 - 2018 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

チベット・ヒマラヤ地域と周辺諸文明との間における歴史的交流を通じて伝播したと考えられる社会システム・宗教・儀礼・言語などの交流史の諸相に関する研究成果を本共同研究班で学際的に集積し、それによってチベット・ヒマラヤ地域の文明の史的展開を多角的に分析し、ユーラシア世界におけるその位置づけの再評価を行なう。7世紀以降、チベット・ヒマラヤ地域は周囲の先行文明の影響を受けつつ、独自の文明を展開させてきた。11～12世紀に仏教を完全に消化して以降、より強固となったチベット文明は周辺文化と交流を繰り返しつつモンゴル～東アジアにその影響力を伸張させた。さらに20世紀半ば以降もその発信力は欧米社会までにも影響を与えている。このような発信力と柔軟性をチベット文明は如何に獲得したのか、また周辺諸文明とどのように相克・調和してきたのか。その具体像を探るべく、多様な視点からチベットと他文明との相互接触の諸相を学際的に分析する。

This research team aims to re-evaluate the historical position of the civilization of Himalaya-Tibetan region in the context of Eurasian history. For this goal, The team accumulates latest academic knowledge of various aspects, such as a social system, religion, ritual and language, on historical and long-term cultural exchanges between the region and surrounding civilizations, and analyze its historical development from various angles. The Himalaya-Tibet region has developed its unique civilization under the influences of surrounding prior civilizations. Assimilating Buddhism in the society made Tibetan civilization more powerful and since then it has widely expanded its influence towards Mongol plateau and Eastern Asia. Even after the middle of the 20th

century, when PRC annexed the region, it still remains its influence so as to reach into Europe and the United States. One has to consider how the Tibetan civilization gained its powerfullness and flexibility, and also trace how it conflicted and found the way to be harmonized with surrounding civilizations. To make clear these issues, the project will analyze the various aspects of multi contact between Tibet and other civilizations.

5. 本年度の研究実施状況

●[研究会と研究報告]: 本年度は合計で 8 回の研究会を行うことができた。班員それぞれの研究関心に沿った研究報告を依頼し、歴史学、文化人類学、言語学の各分野から、古代～現在にいたるまでのチベット文化の諸相について最先端の研究報告を聞くことができた。本年度の特徴として報告者の半数が関西以外の研究者によるものであり、国内における研究者の交流を促進することにも成功したといえる。また議論の時間を出来るだけ多く取ったことにより、異分野からの情報提供・意見交換をより活発に行うことにも成功した。各回の具体的な内容は以下の実施内容を参照されたい。

●[成果報告の打ち合わせ]: 本研究班の成果報告をどのように公開し出版すべきかについて、研究会において打ち合わせを複数回行った。また 11/21 の研究会開催時には、実際に某出版社の編集者も打ち合わせに参加し、より具体的な形での出版打ち合わせを行うことができた。

7. 本年度の研究実施内容

- 2015-01-14
 - チベット文明形成期の特徴: 他文明とくに西アジアとの関係 発表者 武内 紹人 神戸市外国語大学
- 2015-04-18
 - クンイク写本解凍清書時に発生する異読の可能性 発表者 小野田俊蔵 佛教大学
- 2015-05-23
 - チベット帝国と青海東部 発表者 岩尾一史 神戸市外国語大学・非常勤
- 2015-06-20
 - チベット旧社会における村落形態の諸類型 発表者 大川謙作 日本大学
- 2015-07-18
 - 文献に刻まれるチベット語の歴史変化の足跡 発表者 星 泉 東京外国語大学
- 2015-10-10
 - 「作る／パくる」とコピー・ライト: チベタン・ポップから考えるチベット難民社会の所有感覚の動態 発表者 山本達也 静岡大学

- 2015-11-21
 - Neo-Tibetanization：ポスト王政期ネパールにおける“仏教の政治”とヒマラヤ仏教徒 発表者 別所裕介 広島大学
- 2015-12-19
 - 寺本婉雅の再評価：新出資料から 発表者 三宅伸一郎 大谷大学

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	2 (0)				15			
学内(法人内)	3	3	1			3			
国立大学	4	6 (3)				30 (17)			
公立大学	1	4 (2)				23 (10)			
私立大学	8	8 (1)				40 (6)			
大学共同利用機関法人									
独立行政法人等公的研究機関									
民間機関									
外国機関									
その他									
計	17	23 (6)	1			111 (33)			

※（ ）内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	38
国際学術誌に掲載された論文数	2

※（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載

13. 次年度の研究実施計画

- 次年度は、初年度に引き続き研究会を開催する（合計 8 回程度）。初年度と同じく研究報

告を行う形式であるが、同時にコメンテーターを設置して、より専門的な議論が可能な形式に改変する。

- 班員以外にも広く研究報告の門戸を開き、年間のべ2人のゲストスピーカーによる研究発表・講演を企画している。また夏～秋の時期に研究シンポジウムを開催する予定である。規模は2日間、開催地は今のところ東京外国語大学を予定している。合計して年間のべ15人程度の報告者を招聘する予定である。

- 研究成果の公開促進をはかるために専用のホームページを開設し、途中成果の報告を随時行う予定である。

- 研究班活動の拡充をはかるため、新たに所内外から班員を招聘する。現在のところ5人の研究者（歴史学、仏教学、文化人類学）に研究班参加を呼びかける予定である。これにより学際的な議論の活発化と情報交換のさらなる促進をはかる。

14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 9 回 国内出張旅費 (延べ 30 人)	支出予定額 (1,000,000 円)
	一般旅費	国内出張旅費 (延べ 人)	支出予定額 (0 円)
海外旅費	渡航旅費	海外出張旅費 (延べ 人)	支出予定額 (0 円)
	招聘旅費	招待人数 (延べ 人)	支出予定額 (0 円)
謝金 (講演謝金、研究協力謝金、その他の謝金)			支出予定額 (0 円)
消耗品等経費			支出予定額 (0 円)
その他			支出予定額 (0 円)
合計			1,000,000 円

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

共同研究報告書として班員の研究報告に基づく研究論集を編集する準備をすすめる。また一般向けにはチベット学の概論を共同執筆する方向で、毎回の研究班の開催時に分野ごとの素案作成してを検討を重ねていく予定。